実感からロゴスへ
――加藤典洋 著『言語表現法講座』をめぐって

（岩波書店・一九九六年一〇月）

松葉　祥一

「論理的な文章の書き方」というテーマで、一般向けの講座を頼まれることがある。その際、文章の書き方を習うのは小学校以来だとおっしゃる方が多い。確かに、日本の中・高等教育には、文章の書き方を教える機会が不足しているようだ。高校や予備校では小論文対策の授業があり、大学では「知の技法」に類する講義が増えているようだが。

講座では、まず『朝日新聞の用語の手引き』[1]などを使って、用語法や表記法を見直すことから始めている。すなわち、送りがな、読点の打ち方、カタカナ表記の範囲、括弧類の使い方など、現在スタンダードだと考えられる表記法である。次に、木下是雄の『理科系の作文技術』[2]を参考にしながら、文のレベルでの基本的な注意を促すことにしている。すなわち、ここでの目的は論理的な文章を書くことなので、文を短くすること、文末表現を端的にすること、主語を入れることなどである。そして、文と文の関係つまり論理を簡単に見直した上で、接続表現を使うこと、誤謬推理を用いないことを心がけるよう伝える。そして最後に、「見出し文」と呼ばれる段落や文章全体をまとめる文を最初に置くこと、文章の構成法などを示している。

ただ、問題はここからである。こうしたいわばテクニックを知っているだけでは、当然文章は書けない。しかしそれは、書くべき内容、つまり何らかの考えをもつことが必要だということではない。そうではなく、書きながら考え、考えながら書くというプロセスが必要なのである。というのも、書くことと考えることは切り離すことができないからである。メルロ＝ポンティは、この事態を、「言葉の中の思考」[3]と表現した。すなわち、「思考は何ら内面的なものではなく、世界の外、言語の外に存在するものではない」[4]のと同様に、言葉はそれを語る者にとって「すでにでき上がっている思考を翻訳するものではなく、それを完成するもの」[5]なのである。書くことは、表現以前に存在する考えを言語に移しかえる作業ではない。書くことは考えることであり、考えることは書くことなのである。

実感に基づいて書く

しかし、書きながら考えるにしても、少なくともそのきっかけ、あるいは核となるものは必要である。メルロ＝ポンティは、それを「まるで稲妻のように進む」[6]「瞬間的な祈り」[7]

だと形容する。それは、それだけで存在することはできず、「表現されたときにのみ」[8]事後的にそれと把握できるものでしかない。しかし、どうすれば、これをつかむことができるのか。

そのために、講座では加藤典洋の『言語表現法講座』[9]を紹介することしている。大学での講義という形式をとる同書は、著者の他のテクスト同様、平易で、的確な比喩に満ちた語り口で、「言語表現法」を越えた深い思索と、論争的な主張を含んだテクストである。同書が勧めるのは、「違う」、「おかしい」と感じたことを大切にし、それを手がかりに書いていくことである。著者の表現によれば、「上からのロープ」つまり何か普遍的な主張から出発して降りていくのではなく、「下からのロープ」つまり個人的な感情から登っていくことである。

著者が実例としてあげているのは、ある学生が、沖縄のひめゆりの塔の平和資料館を訪れ、実習日誌に書いた次のようなテクストである。

「私はもう嫌だった。戦争の惨事は確かにこれでもか、これでもかの砲撃だったのだ。嫌だの問題ではない。それぐらい分かっている。私はこの資料館の悪意が嫌なのだ。悪意と呼ぶにはあまりにも失礼なら死者とその生き残りの者、その同窓生たちの怨念が嫌だったのだ。何のための資料館か。戦争を二度と繰り返さないためのもののはずだ。これじゃ自己完結してしまいそうだ」[10]。

この文章が大学の論集に再録され、公表されると、大きな反響を呼んだという。沖縄の主要紙の社会面に「大きな誤解と認識不足」という見出しで非難されるに至った。それに対して筆者は、この文章を書いた学生に対して「負けちゃだめだヨ」と励ましたという。それは、この時点で、書き手である彼女に自分の感じたことが正しいのかそうでないのかは、わかっておらず、「その感じ方が、後でよく考えてみると浅薄であった、と反省させられる可能性はいつもある」[11]と考えるからである。つまり、筆者は、この学生の実感が間違っている可能性を認めた上で、それが誤っていることを理解するためにも、この感情を抑圧してはいけない、その感情を大切にすべきだと言うのである。

したがって著者は、「実感」だけが重要であり、普遍的な主張は不要だと述べているわけではない。実感から考えはじめることによって、「その考えが普遍性にいたる必要性と根拠をもつことができる」と言うのである。[12]言いかえれば、著者は、普遍的な価値そのものを否定しているのではなく、普遍命題から特殊命題を演繹する普遍主義を否定し、特殊命題から普遍命題を練り上げる帰納的方法をとるべきだと主張しているのである。その意味で、著者の主張は、個人の実感だけを最終的な価値基準とする「実感信仰」ではないし、普遍的命題は一切不可能だとする相対主義でもない。

実際、普遍主義への批判は、著者の一貫した立場である。彼は、普遍的価値の必要性を認めつつも、それはつねに疑われたり、笑い飛ばされたりしなければならないという。「『ほ

んとう』のことは、大事だし、それをめがけてしかヒトは生きられないが、しかし、その『ほんとう』のことは、笑い飛ばされる必要があるのです。そうでないと、『ほんとう』のことは、何ものもこれを否定できない僭主のような存在になってしまうでしょう[13]」。

ここまでは、著者の意見に同意する。それは、私がかつて普遍主義と相対主義の両方に対する批判から主張した多元主義の立場に近い[14]。しかし、筆者の普遍主義への批判は、時として行き過ぎているように思える。例えば、次の箇所。

「よいことだ、よくないことだ、という範疇の上位に、うれしい、ステキだ、という感情の範疇があります。僕たちはあなたは正しいから好きだ、と言われるより、あなたはステキだから好きだ、と言われる方がうれしいでしょう。正しい人はたんさんありうるけれど、（とても）すてきな人は原理上、そうではないからです。このうれしい、ステキだという感情は、自分からしか発しません。ですから、以前述べた比喩で言うと、書き手が山の上からロープを垂らして、さあ、登っておいで、と話を自分の場所に引き上げようとしても、『かっこいいじゃん』とか、そう言われて、『うれしかった、うん』というこの響きは出てこない。そういう響きが出てくるには、それこそ、話が自分で、下からのロープをハーケンに通し、登ってくるのでないといけない[15]」。

果たして、うれしい、ステキだという感情は、よいこと、正しいことという範疇の「上位」にあるのだろうか。だとすると、うれしい、ステキだという実感を最終的な基準とする「実感信仰」に陥ることになる。それは、価値相対主義の抱える原理的な難点をすべて抱えることになるだろう。すなわち、実感以外の基準を認めない以上、実感が異なれば互いに分かり合えず調停する手段もないという難点、自らの実感を否定する契機を見つけることが難しく現状肯定に陥るという難点、そして実感こそが重要だという主張を「正しいこと」として主張できないという難点である。

ロゴスにもとづいて書く

一見したところ、これとまったく正反対の主張をしているのが、『「イラク戦争」――検証と展望[16]』の討論における藤原帰一である。彼は、日本の「イラク戦争」報道が、感情や雰囲気を伝えるだけで、解釈を決定的に欠いていたと述べている。そして彼は、感情ではなく、「ロゴス（論理）[17]」に基づいて書くべきだと主張しているのである。

すなわち彼は、イラク戦争の際のマスコミ報道があまりにも米軍寄りであり、イラク民衆の立場から、犠牲者の視点から報道を行うべきだったという一般的な意見に対して、次のように述べている。「メディアに対する批判も含めて、この戦争の報道について決定的に欠けていたと思うのは、この戦争についての解釈でした。もしメディアに役割があるとすれば、戦争について考えさせるようなきっかけを読者や見る側に与

えることでしょう。でもこの戦争の意味については、たぶん報道する側も、テレビでコメントしている我々の側も、よくわからなかったし、自信もなかった[18]。そして、「このような解釈にもならない、流れに乗っかっただけの観念を抱えた人たちが、他方では犠牲者の視点が大切だと宣伝するわけです[19]。しかし、「問題は、弱い者、貧しい者、虐げられた者、犠牲について語っていること自体の正当性ではなくて、それが具体的にどのような認識につながるのかということでなければいけない。その大きな図面のところが飛んでしまいますと、結局みんなが心情を同化する映像を出すことによって、ある大きな観念を当然のもののように植えつけるということになります[20]」。

私はこの主張に同意する。今回の「イラク戦争」におけるメディア報道についてのコメントを求められたとき、「座標軸を提示すること」が決定的に欠けていたと述べたことがある[21]。日本のメディアは、一般的な感情と、そこから直ちに一般的な結論だけを提示する傾向がある。しかし、本来必要なのは、その両者をつなぐ理由、論理としての「ロゴス」である。そのためには、出来事を理解するために必要な座標軸、つまり歴史的な事実や地政学的な事実を示し、それ基づいて議論を組み立てることであろう。

しかし、ロゴスの必要性を説き、感情の過剰を批判する著者の所説は、時として行き過ぎを見せる。

「我々はむしろアメリカの市民文化とかイギリスの市民文化とか、『小公女』を読んで育ったわけで、『アラビアン・ナイト』を全部読んでわけ（ママ）ではない。アラブの人民との連帯という観念に、ある明らかな偽善があると私は思います。その偽善に平和主義からの戦争に対する否定があわさってくるわけですね。爆弾で殺された方から戦争を見ていきたいという視点自体は必ずしも偽善だとは思わない。ただ、犠牲者の視点から見ること自体が平和へのメッセージだと考えるのはおそらく間違いだと思います[22]」。

犠牲者の視点から見たいという実感と、平和主義という普遍的理念のあいだに論理がないという結論は、先述の理由から同意できる。しかしその前提として、『小公女』を読んで育った「我々」と一般化されても困るし、『アラビアン・ナイト』を全部読んでいなければアラブ文化への共感の基盤がないというのは、即興の比喩だとしても不当である。そして、とくにアラブの人民との連帯という観念は偽善だという主張は成立しない。なぜなら、ここではそれは実感のレベルの問題であり、アラブの人民との連帯感をもつことは、一般的ではないとしても可能だからである。むしろ批判すべきなのは、そこから平和主義につながる論理が示されていないことであろう。

ここでは、「実感信仰」に対する批判から、一般的でない実感をすべて否定する結果になっている。問題は、実感から普遍的主張へといたる論理が欠けていることのはずである。

実感からロゴスへ

一見したところ、学生とマスコミという対象の違いはあるとしても、両者が勧める書き方は対照的に見える。前者は個人の「実感」を、後者は普遍的な「論理」を手がかりにすべきだと述べているからである。しかし、よく読めば、前者は普遍的な理念を否定しているわけではなく、そこへと至る手がかりとしての実感が重要だとしているのであり、後者も出発点としての感情を否定しているわけではなく、普遍的な主張へと至る道筋としての論理の重要性を強調しているのである。ただ、前者は普遍的な主張を批判するために実感にとどまる傾向があり、後者は実感を批判するあまり、一般的でない実感を否定してしまう傾向がある。

これは、私自身の反省点でもある。ロゴス中心主義や普遍主義を批判しながら、しばしば、普遍的な理念から発想すること、加藤典洋の言い方によれば「上からのロープ」にぶら下がった発想しかしていないことがある。またとくに、現在の政治状況に対する憤りのあまり、論理的な組み立てが弱いまま、結論を言い立ててしまうことがある。

現在、日本のマスコミ、そして市民にとって必要なのは、実感に基づきつつ、それにとどまることなく、普遍性をもった論理に向かって書き続ける粘り強い作業ではないだろうか。それは、例えば北朝鮮の核ミサイルの恐怖を煽り、核武装を訴える人々に対して、完全な安全保障は原理上ありえない以上、国家にどのような安全保障を求めるのかを論理的に考える作業である。[23] あるいはまた、アメリカが求める戦費とイラクの治安維持の肩代わりに対して、「イラク民衆を殺したミサイル代を、私が払う税金で肩代わりさせられるのは嫌だ」、「国際法に反したイラク攻撃と治安維持を自衛隊が行うのはおかしい」という実感を、普遍的な論理に結びつけていく作業である。

註

(1) 『最新版・朝日新聞の用語の手引き』朝日新聞社、一九九七年。
(2) 木下是雄『理科系の作文技術』中公新書、一九八一年。
(3) Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris, 1945, p.209．参照、拙論「メルロ＝ポンティ前期言語論における『沈黙』について」『同志社哲学年報』七号、一九八四年。
(4) *Ibid.*, p.213.
(5) *Ibid.*, p.303.
(6) *Ibid.*, p.207.
(7) *Ibid.*, p.213.
(8) *Ibid.*, p.463.
(9) 加藤典洋『言語表現法講義』岩波書店、一九九六年。
(10) 同書、一三〇頁。ただ、留保をつけておけば、ひめゆり

の塔の記念館の展示を観て、「悪意がある」と感じることと、そのように書くことのあいだには、少なくとも時間的なずれがあるはずだ。その間に、なぜ反省や普遍化の作業が行われなかったのかは問題にすることができる。少なくとも読み手は、それが反省や普遍化のプロセスを経た結果出てきた意見だと受け取るだろう。また、この文章を大学の論集に採録するという編者の決定は、別の次元の問題であり、批判の対象になりうる。

(11) 同書、一三〇頁。
(12) 同書、一三三頁。
(13) 同書、二三二頁。
(14) 拙論「多元主義」『比較文化のキーワード②』竹内実・西川長夫編、サイマル出版、一九九四年所収。
(15) 加藤典洋『言語表現法講義』二一五―二一六頁。
(16) 寺島実郎・小杉泰・藤原帰一編『「イラク戦争」――検証と展望』岩波書店、二〇〇三年。同書全体については、次の書評を参照。拙論「出来事の全体像を描く」『週刊読書人』二〇〇三年九月一九日号。
(17) 同書、三二〇頁。
(18) 同書、三一八頁。
(19) 同書、三一九頁。
(20) 同書、三一九―三二〇頁。
(21) 拙論「イラク戦争からの問い4・メディアの陥穽」『読売新聞』二〇〇三年五月二九日夕刊。
(22) 『「イラク戦争」――検証と展望』三一八頁。
(23) 国家と安全保障については次を参照。拙論「安全は国家のものか?――予防対抗暴力の論理と抵抗権」『現代思想』二七巻一〇号、一九九九年一〇月。

(まつば　しょういち・哲学／倫理学)